国語

（解答番号は ① ～ ㉛ ）

一　次の【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】はともに、滝浦真人・椎名美智編『イン／ポライトネス―からまる善意と悪意』の一節である。これを読んで、後の問い（問1～7）に答えなさい。なお、「ポライト」は「丁寧な・礼儀正しい」という意味である。解答番号は ① ～ ⑮ 。

【文章Ⅰ】

本書は、「インポライトネス」(impoliteness)を主題として編まれた論集である。「インポライト」とはとりあえず「失礼」という日本語で理解してよいと思われるが、「ポライト（ネス）」との深い関係があるために、あえて日本語に訳さないことが多い。最近では、「イン／ポライトネス」のような両者を合わせた表記もよく見るようになった（本書のタイトルでも用いている）。

「ポライトネス」とのインネン浅からぬ関係もさることながら、事情をさらにややこしくする別の事情がある。それは、日本における日本語のコミュニケーションが帯びて（しまって）いる性格に関するもので、日本語で「イン／ポライトネス」論集を刊行するからには、この事情を見ないわけにはいかない。まずはそこからお付き合いいただきたい。

20世紀的なポライトネス研究を批判して一つのカッキを成したEelen（２００１）の意匠を借りて言えば、日本（語）的なコミュニケーションにも3つの偏重があるのではないだろうか？　それらを、

敬語の偏重
建前の偏重
形式の偏重

と名付けたい。

「敬語の偏重」は、「敬語」さえ〝正しく〟使っていればよい、とでもいうかのような風潮そのものを象徴する。例えば、「国語に関する世論調査」（文化庁）では、「今後も敬語は必要」との回答率が１９９２年→２０１３年で49％→85％と急上昇したのみならず、語法に関する回答全般で規範主義化の傾向がケンチョに見られる。他方で、コミュニケーション、とりわけ人間関係の親密化過程における〝タメ語〟の機能はきわめて大きいことが明らかであるにもかかわらず、「上手なタメ語の使い方」といった話題を巷間耳にすることはむしろ希な部類に属しよう。

敬語は〝大人の言葉〟なので、対象者が大人でない場合には、「敬語」に代わって「あいさつ」

が象徴となる。「あいさつ運動」と称される学校での〝あいさつキャンペーン〟は日本中の学校などで行われており、「青少年育成」や「地域づくり」の一環として県レベルでの取り組みとなっているケースも少なくない。そこでは、「ひと・まち・こころの　愛ことば」といったスローガンや、あいさつ運動のキャラクターまで登場し、学校だけでなく、保護者はもちろん、果ては老人クラブまで巻き込んだ「運動」が展開されている。２０１１年の東日本大震災後に話題となった公共広告「あいさつの魔法。」（〈https://ja.wikipedia.org/wiki/あいさつの魔法。〉最終閲覧２０２２年８月31日）よろしく、「おはようございま～す！」などのあいさつに一体どんな〝魔法〟が期待されているのかと訝しく思わざるを得ないが、「あいさつ」が人の「心」の窓のようなものとしての象徴性を一身に背負わされていることは間違いなかろう。

「建前の偏重」は、善なるものに対する自己満足とも言うべき現象として結果する。そもそも、「建前と本音」という表現＝認識・思考スキーマからして日本的特徴と考えるべきかもしれない。それをあたかも自明な共通の前提とするかのような依存傾向によって、人は建前としての善きふるまいをすることが当然のように期待されながら、普段は見せない隠された本音が別にあってもそれまた当然のように見なされがちという、ある種の社会的共通了解のようなものまでが形成されているかに見える。敬語やあいさつに象徴される〝美しい日本語〟が称揚され、それを上手に扱えることが「社会人」としての資格であるかのようにさえ言われる一方で、いじめ、ハラスメント、誹謗中傷、ヘイトスピーチといった〝言葉の暴力〟に甘いように見える日本社会の体質も、それらを思わず吐露されてしまった〝本音〟（〝建前疲れ〟？）として容認する、イ人々の二重構造的な社会意識から来る産物とも解釈できそうに思われてくる。

ただし、この「建前の偏重」が必ずしも昔からのものとは言い難いことも、急いで付け加えておきたい。「建前と本音」のように対にした言い方がいつごろからあるものかと調べてみると、意外とも思える結果となった。国立国語研究所のコーパス横断検索サービス「KOTONOHA」で「本音と建（て）前」と「建（て）前と本音」を検索したところ、そこでの初出はそれぞれ１９７８年と１９８２年で、まだ半世紀も経っていない時期であることがわかった。１９８０年前後といえば、高度成長を経た社会は豊かになった一方、学校での校内暴力が社会問題化し、学級の裏では露骨で執拗な「いじめ」が行われるという、学校におけるまさに建前と本音としての二重構造が世の関心を集め始めた時期でもある。その符合に、何か日本の人々の心性に影響するような、社会の変容を読み取る余地もあるかもしれない。

偏重の３つ目、「形式の偏重」は、何を言うかではなく、どう言うかへの関心が肥大化する傾向にケンチョと言える。『伝え方が９割』というタイトルの書籍が１００万部売れるというのも象徴的な出来事だし、ⓐ企業などの謝罪会見でも、詫びる内容よりも（傾き何度の礼を何秒間といった）形への意識が前面化しやすく思われる（当事者もメディアも視聴者も）。「問題発

言」は毎日のようにあっても、「発言によって誤解を生じさせたのであれば深くお詫び申し上げます」のような（生じさせたのは「誤解」であり、かつそれを仮定した謝罪（？）という）誤魔化しの言葉によって、後に取り消し可能なことになり、当事者は相手と都合に合わせて「詫びは済ませた」と「謝ってなどいない」を適当に使い分けることができてしまう。

「コミュニケーション」とはある内容を伝達することのはずだが、日本語のコミュニケーションについて取り沙汰されるのはいつも、内容そのものよりそれを伝える形に関する「問題な日本語」ばかりだという面も見逃せない。このことの背景要因としては、ⓑ日本語が典型的な〝敬語型言語〟であることも無関係ではないものと考える。言語内に対人関係専用の小体系として「敬語」が存在し、つねにその〝オン／オフ〟が意識されることによって、言語形式に対する意識も強くなる道理だが、そのために敬語の〝形〟を聞き（見て）その規範的正誤ばかりに強く反応する様相が社会全体を覆うことになる。

「よ／ね／か」といったⓒ文末の終助詞に対する依存も強く、例えば、突然「今日は暑い。」と言われたとしても、相手がどういう意図でそれを言いたいのかわからず、受け取りようがないといった事態さえ普通に生じる。「暑いよ」でも「暑いね」でも、話し手の〝つもり〟を示されてはじめて安心して受け取ることができるというのは実は厄介なことである。裏を返せば、中身よりも相手の気持ちを忖度する方が大事ということになって、相手の終助詞を聞いて終助詞で呼吸を合わせるといった聞き方さえできてしまう言語だと言ったら言いすぎだろうか？

さて、これらの偏重は「日本（語）的なコミュニケーション」における現象に過ぎず、言語研究はそれとは独立である、と言えるだろうか？　残念ながら答えは限りなく「否」に近いように思われる。研究といえども超越的に存在するわけではなく、世の関心の反映として営まれる側面を持つのは当然ではあるが、それにしても極端に少ない現状は、それ自体あらためて見ておく価値がありそうに思える。

そこでまず、3つの偏重に関わりが深いと思われる言語研究上のキーワードとして、「敬語／ポライトネス／インポライトネス」をタイトルに含む論文や書籍の数を調べてみることにした。結果を表1に示す。Google Scholar と CiNii Research の検索結果を並べて掲げているが、おおむね前者は論文等の、後者は書籍の数を推定するためである。

（本文中に一部省略・改変したところがある）

表1　タイトルワードの検索結果（敬語／ポライトネス／インポライトネス）

Google Scholar ヒット数（タイトル内一致、日本語結果のみ、最終閲覧 2022 年 9 月 6 日）

キーワード	敬語	ポライトネス	インポライトネス
ヒット数	約 599	約 246	10

CiNii Research（本）ヒット数（タイトル内一致、日本語結果のみ、最終閲覧 2022 年 9 月 6 日）

キーワード	敬語	ポライトネス	インポライトネス
ヒット数	約 675	48	0

【文章Ⅱ】

日々の暮らしや世の中に目を移せば、そこには剝き出しの悪意がいくつも口を開けて待っている。学校では、一歩間違えると、ある日突然「いじめ」のターゲットになっている自分がいるかもしれないし、大人になればなったで、大学ではアカデミック・ハラスメント（アカハラ）、職場ではパワー・ハラスメント（パワハラ）の餌食になるかもしれず、世の中で名のある立場になったなら、何をきっかけにネット上での誹謗中傷を受けるかしれない。さらには、自分のルーツや宗教、性的指向や身体的特徴などが攻撃対象となって、突然ヘイトスピーチを浴びせられるかもしれない、等々。とりあえずこれらは〝言葉の暴力〟と呼ぶにふさわしく、実際、程度がエスカレートすれば、民事や刑事のソショウ[D]沙汰となることもあり、また被害者が苦にして自ら命を断つケースがあることも周知のとおりである。

では、ことばの学はこうした言葉の暴力に対してどう向き合ってきただろうか？　本書の寄稿者[ウ]でもある柳田は、次のように述べてこれまでの社会言語学（者）を批判している。

社会言語学者は言語学者であるという自己認識のもと社会をおざなりにする態度は、社会言語学を発展させていくとはとても思えない。

（柳田２０１５：要旨）

以下はすべて筆者のジカイ[E]を込めた記述ということになるが、これらの事象に対して言語（学）的なアプローチによる研究がどれだけあったかを調べてみると、少々驚くべき数字を見ることになる。１９８０年代以降、社会の関心を集めるようになった類型として、上の４つ「いじめ／ハラスメント／誹謗中傷／ヘイトスピーチ」を論じた文献がどのくらいあるかを、前節と同様にGoogle ScholarとCiNii Researchで調べた。タイトル検索として４つのキーワードで調べた後、各々に「言葉 or ことば or 言語」を加えた検索語で再度調べた。その結果が表２である（表内ではスペースの関係で「言葉 or 言語」としている）。

単純なキーワード検索では、各々「１５２０／４３６／２４／１０７」「１５８７／５０３／１０／６１」という（全体的には）それなりの数字が得られるが、「言葉 or ことば or 言語」を加えると激減し、「１０／４／０／２」「９／１／０／０」という値になってしまう。問題として認識されてきた期間が長くなると増える傾向はあるかもしれないが、如何せんカテゴリーの絶対数があまりにも少ない。

では、この小さな数字のうちで、内容的にも言語（学）的アプローチによる論考はというと、さらに少なくなってしまう。「いじめ」はすべて心理学系か教育学系だったので０件、「ハラスメント」はほとんど法学系だが、言語哲学的な考察が１件あり（池田２０１８）、「ヘイトスピーチ」で、批判的社会言語学と法言語学からの考察が各１件（山下２０１６、橋内２０１７）

と、法と言語の観点から編まれた論集が1件（中川他２０２１）、となった。思い切って要約してしまえば、日本において広義の言語学的観点から言葉の暴力を主題的に考察した研究は、ほぼないと言って差し支えないような状況にあり、「ハラスメント」や「ヘイトスピーチ」をめぐる論考の発表年を見ても、ようやく始まったばかりと言うべきだろう。

表２　タイトルワードの検索結果（いじめ／ハラスメント／誹謗中傷／ヘイトスピーチ／差別（語））

Google Scholar ヒット数（タイトル内一致、日本語結果のみ、最終閲覧 2022 年 9 月 6 日）

言葉の暴力キーワード	いじめ	ハラスメント	誹謗中傷	ヘイトスピーチ
ヒット数	約 1520	約 436	24	約 107
キーワード	いじめ and 言葉 or 言語	ハラスメント and 言葉 or 言語	誹謗中傷 and 言葉 or 言語	ヘイトスピーチ and 言葉 or 言語
ヒット数	10	4	0	2

CiNii Research（本）ヒット数（タイトル内一致、日本語結果のみ、最終閲覧 2022 年 9 月 6 日）

言葉の暴力キーワード	いじめ	ハラスメント	誹謗中傷	ヘイトスピーチ
ヒット数	約 1587	約 503	10	61
キーワード	いじめ and 言葉 or 言語	ハラスメント and 言葉 or 言語	誹謗中傷 and 言葉 or 言語	ヘイトスピーチ and 言葉 or 言語
ヒット数	9	1	0	0

（注）＊スキーマ――枠組み。

（本文中に一部省略・改変したところがある）

問1　二重傍線部A～Eに相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。解答番号は［①］～［⑤］。

A　インネン　［①］

① 婚礼のシュクエンを催す。
② 家庭サイエンに挑戦する。
③ エンムが上空に漂う。
④ エンガワでくつろぐ。
⑤ アエンでメッキ加工する。

B　カッキ　［②］

① 法案をカクギで決定する。
② 会社のエンカクをまとめる。
③ 事件のカクシンに迫る。
④ 周囲とカクゼツした生活を送る。
⑤ 制度をカクイツ的に変更する。

C　ケンチョ　［③］

① 課題がケンザイ化する。
② ケンメイに仕事に打ち込む。
③ 土地のケンリを譲渡される。
④ 隣国にヒケンする生産力。
⑤ ケンキョな態度で人と接する。

D　ソショウ　［④］

① 緊急のソチが取られる。
② ソゼイを取り立てる。
③ 美術館でソゾウを鑑賞する。
④ 社長に人事異動をジキソする。
⑤ 行き来が次第にソエンになる。

E　ジカイ　［⑤］

① カイショで丁寧に書く。
② カイゲン令が敷かれる。
③ 立会人としてカイニュウする。
④ 調子に乗ってカイキエンを上げる。
⑤ 海外事業をテンカイする。

問2　傍線部ア「『あいさつ』が象徴となる」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は［⑥］。

① 敬語は大人が使う言葉なので、子どもが敬語をうまく使えなくても大目に見てもらえるが、その代わりに敬語を使う姿勢を育てるために、他人に対する「あいさつ」を習慣づけるということ。

② 「あいさつ」は日本的なコミュニケーションの代表的なものとして認識されているだけでなく、子どもの心を健全に育てるための魔法の力を持つものとして、重視されているということ。

③ 敬語を正しく使えていれば人間関係を円滑化できるという思い込みがあり、「あいさつ」も人間関係を円滑化するものとして、学校や地域で推奨する運動が活発化しているということ。

④ 美しい言葉遣いを心のありようの表れととらえる風潮は、大人については敬語を正しく使えるかを主眼とし、青少年については「あいさつ」を重視するという形で現れるということ。

⑤ 敬語と同様に「あいさつ」のできない人間は失格者という烙印（らくいん）を押されかねないため、さまざまなキャンペーンやスローガンやキャラクターまで作って地域一丸で取り組んでいるということ。

問3　傍線部イ「人々の二重構造的な社会意識から来る産物」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は ⑦ 。

① 日本人は、いじめ、ハラスメント、誹謗中傷、ヘイトスピーチといった〝言葉の暴力〟に対して寛容だが、それは、たとえ言葉の暴力をふるったとしても、普段の行いが善なるものであるならば許されるという暗黙の了解があるからである。

② 人を傷つける言葉を、思わず漏れた本音として許容してしまう傾向があるのは、建前としての善きふるまいをすることも、それとは別に隠された本音があることも、人間として当然のことという共通了解が日本社会に存在するためである。

③ 「建前と本音」という日本独特の思考スキーマは、相手が望んでいない本心やネガティブな感情を表現するのは大人げなく、相手を尊重し、傷つけないために使う言葉が「建前」であるという、自己正当化の上に成り立っている。

④ 「本音」とは自身の中に芽生える自然な感情であるが、常に周囲の反応や他人の顔色をうかがって過ごすことに疲れている人々には、ヘイトスピーチのような言葉の暴力も、人前で堂々と本音を言える勇気のある行動に思える。

⑤ 人の和を尊重する日本人は、本音をぶつけて人間関係に軋轢（あつれき）が生まれることを嫌う一方、建前は決して嘘（うそ）ではないため、言葉と思いが一致していなくても構わないと考える「建前と本音」という二重構造が日本には古くから存在する。

問4　波線部ⓐ「企業などの謝罪会見」、波線部ⓑ「日本語が典型的な〝敬語型言語〟であること」、波線部ⓒ「文末の終助詞に対する依存」における共通点の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は ⑧ 。

① 謝意や敬意や意図を表現するための形式にこだわり、反感を持たれないように努めながら、言質を取られることなく後で取り消し可能にしたり、終助詞で相手の意向に合わせたりして、自分のペースに持ち込む点。

② 企業などの謝罪会見ではお辞儀の角度や時間が、敬語では規範的正誤が、終助詞では相手の意図を判断する基準が、それぞれ重要であるというように、相手に不快な気持ちを起こさせない正しさばかりを追求する点。

③ コミュニケーションについて取り沙汰されるのは「問題な日本語」ばかりであり、謝罪会見では失言をしないことが、敬語では用法を間違えないことが、終助詞では相手の意向を読み違えないことが肝要である点。

④ 企業などの謝罪会見でも敬語の使用においても、正しい形かどうかという意識が前面化しやすく、文末の終助詞に対する依存が強いのも、自分が不安にならないように話し手の〝つもり〟という形を示そうとする点。

⑤ 伝える中身よりも相手がどう受け取るか、伝えられる中身よりも相手がどのような気持ちなのかに関心があり、内容自体への意識は疎(おろそ)かでも、伝える形さえ気にしていれば無難にやり過ごせるという思考が透けて見える点。

問5　【文章Ⅰ】中の表1と、【文章Ⅱ】中の表2について、ある高校生が次のように【メモ】にまとめた。【メモ】の空欄 X ・ Y に当てはまる表現の組み合わせとして最も適当なものを、後の①～④の中から一つ選びなさい。解答番号は ⑨ 。

【メモ】

【文章Ⅰ】中の表1は、「敬語の偏重」「建前の偏重」「形式の偏重」という3つの偏重に関わりのある言語研究上のキーワードに着目して、論文や書籍の数を調べたものである。検索の結果、 X ことがわかった。

【文章Ⅱ】中の表2は、「いじめ／ハラスメント／誹謗中傷／ヘイトスピーチ」を論じた文献の数を調べたものである。上段は Google Scholar で、下段は CiNii Research で調べたものだが、それぞれ4つのキーワードを含むタイトルを調べた後、4つのキーワード＋「言葉 or ことば or 言語」で検索している。検索の結果、 Y ことがわかった。

① X 「敬語」というタイトルの論文・書籍の多さが群を抜いていることから、日本社会で敬語が重視されている
Y 「いじめ」についての研究は多いが、問題となって比較的歴史の浅い「ハラスメント／誹謗中傷／ヘイトスピーチ」に関する研究はまだ少ない

② X 「インポライトネス」に関する書籍が少なく、「インポライトネス」という概念は、一般に浸透していない
Y 「いじめ／ハラスメント／誹謗中傷／ヘイトスピーチ」はいずれも言葉の暴力であるにもかかわらず、そのようには認識されていない

③ X 「ポライトネス」に関する論文は多いが、実用に適していないため、「敬語」ほどには書籍化されていない
Y 「いじめ／ハラスメント／誹謗中傷／ヘイトスピーチ」という単純なキーワード検索では、それぞれの事象に対する関心度を測れない

④ X 「建前」が重視される日本では、「形式」「美しい日本語」に関連する「ポライトネス」が人気で、「インポライトネス」は不人気である
Y 「いじめ／ハラスメント／誹謗中傷／ヘイトスピーチ」という事象を扱った文献は多いが、言語学の観点で考察したものはほぼない

問6　傍線部ウ「本書の寄稿者でもある柳田」とあるが、筆者がここで柳田の言葉を引用した理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は ⑩ 。

① 日本のように社会的二重構造が存在する国では、言語の暴力に対して、「ポライトネス＝礼儀正しい／インポライトネス＝失礼」という社会言語学的な区分は意味がないと考えているから。

② 社会言語学は、言語の研究ばかりに目を向けるのではなく、社会のなかでの言語の使われ方を研究すべきであり、言葉の暴力に対しても言語学的観点から考察すべきであると考えているから。

③ 社会言語学を発展させていくためには、日本的なコミュニケーション事情を踏まえながら、「イン／ポライトネス」という概念を一般的なものにしていくことが必要だと考えているから。

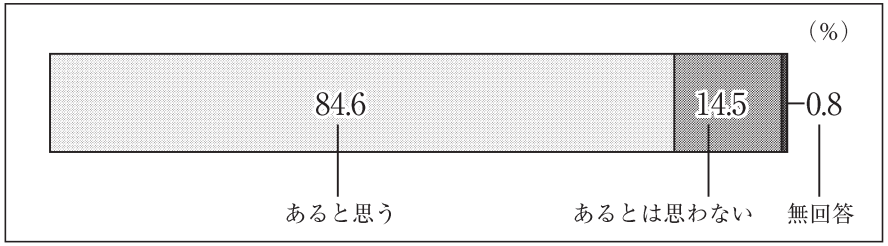
④ 「いじめ／ハラスメント／誹謗中傷／ヘイトスピーチ」といった言葉の暴力に苦しむ人のために、被害を受けないことを目指す「ポライトネス」を社会言語学の立場から発信すべきだと考えているから。

⑤ 社会を通して言語をとらえる社会言語学は、何をきっかけにハラスメントや誹謗中傷やヘイトスピーチを受けるかわからない現代社会で、言語の暴力に反対する姿勢を示すべきと考えているから。

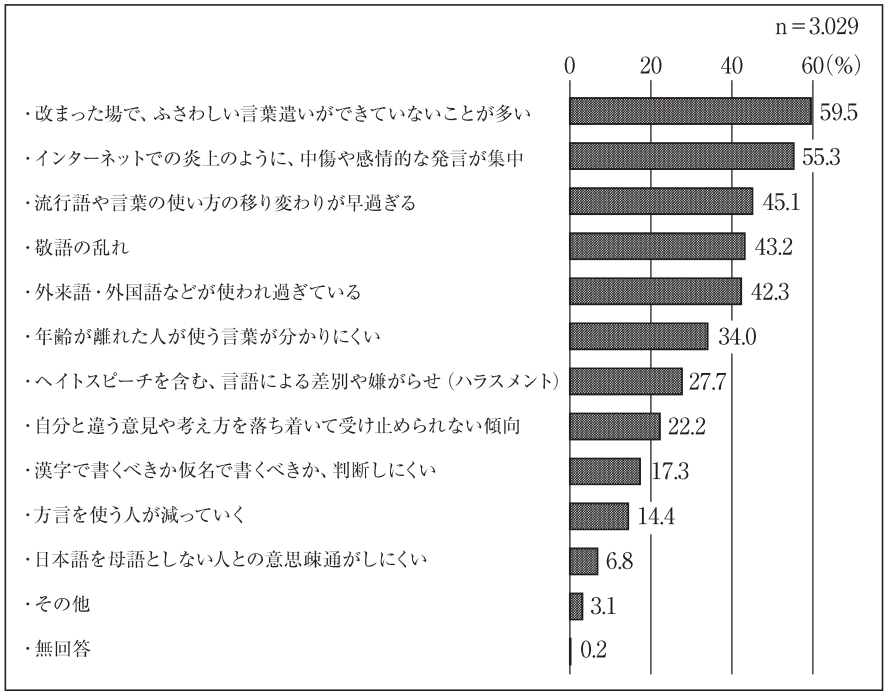
問7　次の【資料】は、「令和3年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」の一部である。これについて、本文を読んだ高校生五人が話し合っている。(1)～(5)の発言について、本文と【資料】の内容を踏まえた発言として適当なものには①を、適当でないものには②を、それぞれ選びなさい。解答番号は ⑪ ～ ⑮ 。

【資料】

〈問〉言葉や言葉の使い方について社会全般で課題があると思うか



〈付問〉（〈問〉で「あると思う」と答えた人に対して）社会全般で、どのような課題があると思いますか。（幾つでも回答）



（文化庁：「令和3年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」をもとに作成）

(1)　生徒A――「敬語の乱れ」を気にする人が多いね。「今後も敬語は必要」と考える人が大半だと本文にあったことから、そのうちの半数の人が正しい敬語を使うべきと考えているということになるね。 ⑪

(2)　生徒B――改まった場でのふさわしい言葉遣いというと、まず敬語が思い浮かぶけど、あいさつをきちんとすることとか、くだけた言葉を使わないことなども含まれるんだろうね。 ⑫

(3)　生徒C――私が注目したのは、インターネット上での中傷や差別発言を課題に挙げている人が多いこと。筆者はインポライトネスが問題として認識されていないと言ってたけど、この結果を見ると違うよね。 ⑬

(4)

生徒D――「言葉の使い方の移り変わりが早過ぎる」と「年齢が離れた人が使う言葉が分かりにくい」は同じ系列の問題だよね。由緒正しい美しい日本語が使われなくなってやがて失われるのは避けたいな。 ⑭

(5)

生徒E――「自分と違う意見や考え方を落ち着いて受け止められない傾向」は、言葉の使い方の問題ではない感じもするけど、インポライトネスにつながる姿勢だから、警鐘を鳴らす必要があるね。 ⑮

二　次の文章は、沢木耕太郎『無名』の一節である。これを読んで、後の問い（問1～7）に答えなさい。解答番号は ⑯ ～ ㉛ 。

担当医と婦長*が帰ると、父はぐっすりと眠りはじめた。家に帰ったことで安心したのかもしれなかった。

その寝顔を見ながら、私はできるだけ早く父の句集を作ろうと思った。

あまり遅くなると電車がなくなってしまう。

午後十時、私は父が五十代から六十代にかけて作った句の出ている句誌の切り抜きと、二冊の作句ノートを借りて帰ることにした。できれば父が生きているあいだに句集を出したい。あと何日生きられるのかわからないという現在の状況では、編集して、印刷して、製本してという時間をどんなに縮めても、やはり間に合わないかもしれない。しかし、句集を出すという努力をしているあいだは、父の命がもってくれるかもしれないという根拠のない希望がなくもなかった。

ⓐ夜の上り電車はがらんとしていた。私は車両と車両のつなぎ目のところにある、いちばん奥の席に座って父の作句ノートを取り出した。そのノートには、すでに句誌の雑詠欄に載った句もあれば、まったく眼（め）にしたことのない句もあった。しかし、作句ノートにしか見えない、言わば未定稿の句の中にも、なかなか悪くないものがあった。

しばらく読み進めていくうちに、その作句ノートの後のページにガリ*版刷りの切り抜きが挟み込まれているのに気がついた。父の句が載っている雑詠欄のページを切り取ったものだろう。母が束ねて保管してあるものから洩（も）れてしまった一枚なのかもしれない。そう思いながら広（ア）げてみて、私は驚いた。そこには、句ではなく、父のエッセイが載っていたのだ。

私は父が文章を書いていたとは思ってもいなかった。考えてみれば、句誌に俳文が載るのに不思議はない。父のエッセイも自作の俳句についての文章だった。しかし、これまで、私は父の文章を読んだことがなかった。長い旅に出ていた時期に何通かの手紙を一方的に出した以外、およそ手紙のやり取りというものをしてこなかったから、父がどのような文章を書くのかなど、想像したこともなかった。

それは、「幼時の記憶」と題された、四百字詰めの原稿用紙にして三枚くらいと思われる短いエッセイだった。時期的には、父の五十代の終わりから六十代の初めにかけて書かれたものと思われた。

「幼時の記憶」

*樟脳を纏ひし母の冷たさよ

先年九十二歳の高齢で物故された知人がいる。私はその晩年の十四五年を親しくしていたので、話し好きのその人から種々と面白い話を聞くことが出来た。九十二歳という世にも稀な高齢にも拘わらず頭脳は少しも衰えてはいず、話に少しもピントのはずれた所がない。驚嘆すべき人だった。東京生まれの老人は、私の知らない東京の風俗を飽きずに話してくれる。私も飽きずに聞いたものである。

そして話を聞きながら私に一つ気付いた事があった。老人の記憶は現在からさかのぼって遠い昔になればなるほど鮮明なものになるらしいことである。所帯を持ってからよりも独身時代、それも一層幼少時代の方が話に精彩があり、話している当人も嬉しそうなのである。今の私はこの老人の年齢には未だ大分開きがある。しかし幼時を思い出し懐かしむ情は老人と全く同じ様である。

冒頭の句は、そうした私の句なのである。私も又、幼少期の方が思い出すのにより愉しくもあるし、鮮やかでもある。一例を挙げれば、時間を決めて家に来る髪結いに、小さな鏡台に向かって髪を上げさせている若い母の横顔は、*鬢付け油の匂と共に昨日の事のようにはっきり思い出す。そして樟脳を——外出しようとする母の晴着から舞い昇る樟脳のひいやりとした匂と、絹物の持つ特有の冷たい肌触り、しゃんと身仕舞した外出姿の何か普段とは違った取り付きにくさ——を纏いし母の冷たさよである。

正直に言うと、始めは「樟脳の匂ひて母の冷たさよ」であった。しかし、これが手帳に書いたきり、人に見せないものならこのままですませてしまったのだが、句会に出すとなると些かこわくなってしまったのである。樟脳が匂うのは当り前だろうという*半帖が飛び出してきそうな気がしたのである。あれこれ考えた末、纏いし、とおさめた。そして一度纏いしと決まると、母の冷たさよという気障っぽい言い廻しで、それほど自分に抵抗なくまとめ上げることができたのである。

それにしても、「匂ひて」と「纏ひし」と——イたしか本因坊秀哉だった。ある対局を見ていた彼は「どうして素人衆はあゝ悪い方へ悪い方へと石を下ろすのだろう」と不思議な面持ちで呟いたそうである。

冒頭の句の善し悪しは私にはわからないが、文章は一編のエッセイとしてそう大きく破綻があるものではない。いや、かなりまとまっていると言ってもいいだろう。だが、私がその文章を眼にして驚いたのは、文章のまとまりではなくそのリズムである。黙読していても、文章のリズムははっきりわかる。そのリズムが、私の書くものとよく似ているような気がしたのだ。

とりわけ、最後の段落の数行は、一瞬、自分が書いたのではないかと錯覚しそうになるほど似ていた。

《それにしても、「匂ひて」と「纏ひし」と――たしか本因坊秀哉だった。ある対局を見ていた彼は「どうして素人衆はあゝ悪い方へ悪い方へと石を下ろすのだろう」と不思議な面持ちで呟いたそうである》

この「樟脳を纏ひし母の冷たさよ」という句の、いわば臍（へそ）Bともいうべき「匂ひて」という言葉を、考えに考えたあげく「纏ひし」と変えたことについて、父は一方で微（かす）かな自負を示しつつ、他方で「下手の考え休むに似たり」と自分を笑い飛ばしている。

私は父の文章を読んだことがない。これを書いた時点では、父も私の文章を読んでいない。私が雑誌に文章を書き出したのはそれ以後のことである。だから、互いが互いに影響を及ぼすということは考えられない。にもかかわらず、文章のリズムと、その発想の仕方に私はどこか似たものを感じざるをえなかった。

ⓒ父の文章とはこういう文章だったのか……。

父がかつて文章を書いていたこと、いや、書こうとしていたらしいことは知っていた。

数年前、母が私と二人だけのときに言った。

「お父さんが、今度の本はとてもよかったと言っていたわよ」

それはいつものことだったので、私は軽く聞き流した。

「そう」

すると母は、あなたが書いていることは嬉しいのだと思うと言い、父がかつて文章で身を立てようとしたことがあるらしいことを教えてくれたのだ。私には初めての話だったので、ⓓ母に向き直るような感じで耳を傾けた。

戦後、復員したものの職がなく、闇屋の真似事（まねごと）のような仕事をしてわずかな収入を得ていた時代のことだったらしい。何かの折に、もし自分に時間があれば小説を書くのだが、書ければそれで食べていけると思うのだが、というような意味のことを呟いた。時間がないので書くことができない。自分に時間さえあれば……。それを二度、三度と聞かされたあとで母が言った。わかりました。仕事をしなくて結構ですから好きなだけ小説を書いてください。生活費は、わたしがなんとしてでも稼ぎますから。でも、一年経（た）ってだめだったら諦めてください。

そうして父が家にいて小説を書き、母が外に出て働くようになったのだという。父がどのような小説を書こうとしていたかはわからない。ところが、半年経ったとき、父がいきなり母に告げた。自分には小説は書けない。それがわかった。もうやめようと思う。母がまだ半年あるのだからもう少し頑張ったらと勧めると、続けても同じことだときっぱりした口調で言ったと

いう。

以後、父は書くとか書きたいとかいうことをいっさい口にしなくなった。そして、父はとうてい自分に合いそうもない仕事を黙々とやるようになったのだという。

なぜ途中で諦めたのか。自分の才能に見切りをつけたのか。母が苦労しているのを見かねたのか。いずれにしても、父には自分の才能を信じてあくまでも突き進んでいくという野蛮さ(C)がなかった。続けられること、それが才能だとすれば、その最初の大事なところで才能を欠いていたことは確かだったのだろう。

だが、私は母からその話を聞きながら、内心ひどく動揺していた(ウ)。母に気づかれないようにしていたが、思いはさまざまに乱れていた。

驚いたのは、父のその振る舞いではない。そうした断念の仕方は、祖父*の形見の大島をめぐる母とのやり取りからも想像できないことはなかった。何かを思い切れば、その思いに従うことは苦でもない人なのだろうとは思っていた。だから、驚いたのは書くことをいったんは志しながら断念したというそのこと自体にあったのではない。実は、私も父とよく似たようなことをした経験があったのだ。

高校時代、クラスメイトに文芸部の中心人物がいて、一年に一回出している部誌に小説を書くことを勧められた。どうしてそういうことになったかというきっかけは覚えていないが、とにかく文芸部の部誌に載せるため、一年に一回、二十枚から三十枚ほどの短編小説を書くようになった。

高校を卒業し、大学に入ったとき、初めて長めの小説を書きたくなった。どうしても二十歳前に「傑作」を書かなくてはならないと思い込んでいた私は、十九歳の誕生日を少し過ぎた頃、ようやく横浜の少年少女を主人公にした百枚ほどのものを書き上げることができた。そして、それを当時よく読んでいた文芸批評家のもとに送った。文学賞に応募することはまったく考えなかった。ただ、その批評家に読んでもらいたかった。しかし、そのとき私は何を望んでいたのだろう。読んだ批評家が、「脱帽！」とでも言ってくれることを夢見ていたのだろうか。だが、それからしばらくして、原稿はそのまま送り返されてきた。そこには、いま主人は忙しくて読むことができないので悪しからず、という夫人の手紙が添えられていた。

私はその手紙を読んで、自分に舌打ちしたくなった。なんという恥ずかしいことをしてしまったのだろう。夫人の鄭重な文面が恥ずかしさを倍加させた。もう二度とこんなことはすまい。私の中で、その決意が、二度と小説は書くまいという思いに転化するのはすぐだった。実際、それ以来、二度と小説を書く気になれなかった(エ)。

父は私が高校時代に小説を書いていたのを知っていた。それについては何も言わなかったが、ただ一度だけ大学時代に訊かれたことがある。

「最近、小説は書いているのかい」

「いえ」

もちろん、その理由は訊ねられなかったし、訊ねられても言わなかっただろう。

「そうか……」

そう呟いた父は、そのときどんな思いだったのか。父の断念の具体的な経緯は知らないが、断念があっただろうことはわかる。だが、それなら、なぜ父は俳句を始めたのだろう。父にとっては俳句が小説ほど重さのあるものではなかったからなのか。

父の俳句は独特のものだった。少なくとも私にはそう見える。いわゆる「境涯俳句」に近いようでいてそうではない。ディレッタンティズムに冒されているようでいてそうでもない。町風でいてそうでもない。ⓔそうした父の俳句が、参加していた小さな句誌の人たちに理解されていたとは思えない。父の句の載っているページの切り抜きの、前後の句を読むかぎりではそう思わざるをえなかった。ほとんどが、ごく普通の写生句の域を出ていない。そのせいか、父が好きだったのが久保田万太郎の句だということで、いくらかの揶揄を含んだ調子で「万太郎調の句」というような括り方をされたりしていた。

ところが、「幼時の記憶」が挟み込まれていたのとは別の、もう一冊の作句ノートに、父の句を取り上げ、句会の宗匠役の人が懇切な批評をしているページが挟み込まれていた。対象となったのは芥川龍之介の忌日である河童忌を詠んだ句だった。

河童忌や竜舌蘭は尖痛し

この父の句について、宗匠はこう述べていた。

この俳句の上五、中七、下五を見ていくと、なんといっても中七の「竜舌蘭は」の発見が素晴らしい。芥川龍之介の容貌を思い出してほしい。あのカミソリのような顔立ちと、エキゾチックな硬質植物としての竜舌蘭が実によくマッチしているではないか。これがまず「河童忌」を扱った俳句として類想のない秀句とさせているものだが、さらに下五において「尖痛し」と詠い、龍之介晩年の病的な精神状態を巧みに把握している……。

薔薇の香やつひに巴里は見ざるべし

この父の句についても、宗匠は《五十八氏の端倪をゆるさぬ作句ぶりは、ついにここに極まれりともいえる一句である》と述べてから、次のように評している。

《私は氏の若き日の人生遍歴を知らぬが、この作者にして、ついに巴里は見ざるべしと詠わ

れると、何の抵抗感もなく素直に受け入れられるものを氏は持っているのである。巴里などと下手に詠うと、俳句の上では鼻持ちならぬ気障な言葉ともなるが、この句からは、これが少しも感じられない。氏にして初めて詠える巴里だからであろう。薔薇の季語によって、私には、氏の若き日が一層偲ばれるのである。

これを読むと、父をかなり深いところから理解してくれていたような気がする。父がその句誌に投句しつづけたのも、この人がいたからなのかもしれない、と思った。だが、何かの理由で、その会から宗匠が離れていってしまったというのは聞き知っていた。父が急速に作句に興味を失っていったのも、もしかしたらそれが原因だったのかもしれない。

（注）＊婦長――看護師長。

＊ガリ版――正式には謄写版という簡易な印刷装置。コピー機が普及するまで、学校などで日常的に使われていた。

＊樟脳――クスノキの木片を蒸留して作られる天然の芳香・防虫剤。

＊髪結い――理容師。

＊鬢付け油――日本髪を結う際に用いる練りの固い油。

＊半帖――「半畳」のこと。ここでは人の言動を茶化したり野次ったりする言葉。

＊本因坊秀哉――囲碁の棋士。川端康成の『名人』のモデルでもある。

＊祖父の形見の大島をめぐる母とのやり取り――大島とは高級着物である大島紬のこと。祖父の形見の大島の着物を、母が売って娘の七五三の着物を仕立てたことを父は残念がって、お金に困るたびに「あの大島があれば」と言っていたが、母に抗議されて以降、一度も口にしなかったことをいう。

＊境涯俳句――作者の人生、主に貧困や逆境・病気などを詠んだ俳句。

＊ディレッタンティズム――芸術や学問を楽しむこと。

＊宗匠――ここでは和歌の師匠。

＊端倪――推測すること。見通すこと。

問1　二重傍線部A～Eの本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。解答番号は⑯～⑳。

A　ピントのはずれた　⑯

① いいかげんな
② 一貫性のない
③ つじつまのあわない
④ 主題からずれた
⑤ 興味をそそられない

B　臍　⑰

① 中心的なテーマ
② 句の味わい
③ 悩みどころ
④ 肝心な部分
⑤ 欠点

C　野蛮さ　⑱

① 誠実さ
② 豪快さ
③ 不器用さ
④ 荒々しさ
⑤ 男らしさ

D　揶揄　⑲

① あてこすり
② 風刺
③ 賞賛
④ 冷笑
⑤ からかい

E　鼻持ちならぬ　⑳

① 不愉快な
② 生意気な
③ 気どっている
④ 違和感がある
⑤ あくの強い

問2　傍線部ア「広げてみて、私は驚いた。」とあるが、これはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は㉑。

① てっきり父の作句ノートだと思っていたのに、自作の俳句についてのエッセイが載っていたのが意外だったから。

② 「私」が小説を書いているのを知りながら何も言わなかった父が、文章を書く人だとは知らなかったから。

③ 一度も父の口からは聞いたことのない、幼少時代の父の、祖母との思い出がつづられたエッセイだったから。

④ 父の句集を出してやりたいと思っていたが、文章も書いていたとわかり、計画を変更しなければと思ったから。

⑤ これまで父の文章を読んだことがなかったため、父が句誌に文章を寄せていたとは思いもしなかったから。

問3　傍線部イ「たしか本因坊秀哉だった」とあるが、本因坊秀哉の言葉を引用した父の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は㉒。

① 自分は俳句詠みとして素人なので、本因坊秀哉が言うように、悪い方へ悪い方へと変えてしまったのではないかと心配になっている。

② たとえ結果的には悪手になってしまっても、自分が納得できるまで句を推敲（すいこう）し続けるのが俳人としての矜持（きょうじ）であると自負している。

③ いい言葉選びができたと満足しつつも、名人の域には遠い自分のような凡人があれこれ考えるのは無駄だったかもしれないと自嘲的になってもいる。

④ 目をつむっていても最適手を打てる本因坊秀哉のような天才には、言葉ひとつで逡巡（しゅんじゅん）する一俳人の気持ちは到底わかるまいと嘆いている。

⑤ 句会では、自分はたいしてうまくもないくせに、本因坊秀哉のようにしたり顔で他人の句を批評して喜ぶ人間がいると不満を抱いている。

問4　傍線部ウ「内心ひどく動揺していた」とあるが、これはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は㉓。

① せっかく母が一年の猶予をくれたのに、父が半年で小説を書くことを断念した事実を受け入れられなかったから。

② 小説家として食べていくことへの未練をきっぱり断ち切った父のかつての心情を思うと、胸が痛んだから。

③ 時間さえあれば小説を書いて食べていけると夢見て、母に大変な苦労をさせた父の姿に自分を重ねたから。

④ 自分も小説を書くのをあきらめていた時期があり、父が同じような経験をしていたことに驚いたから。

⑤ いったん自分の才能に見切りをつけながら、晩年になってまた書き始めた父の思いに感銘を受けたから。

問5　傍線部エ「それ以来、二度と小説を書く気になれなかった。」とあるが、これはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は㉔。

① うぬぼれた大学生が書いた未熟な小説を、批評を仕事としている人に送りつけた自分の向こう見ずなあつかましさが無性に恥ずかしく、小説を書くこと自体をやめてしまおうと決意したから。

② 脱帽したと称賛されることを確信して批評家に原稿を送ったのに、読んでさえもらえずに素っ気なく送り返されたことでプライドが傷つき、書くことに対して気持ちが後ろ向きになったから。

③ 批評家の妻から届いた手紙の慇懃無礼（いんぎんぶれい）な文面が、自分の子どもっぽい思いつきを憐（あわ）れんでいるように感じられて、なんと馬鹿なことをしてしまったのかという後悔にさいなまれたから。

④ 苦労して書いた小説を、何の批評もせずに送り返すという心ない仕打ちを批評家にされた屈辱によって心が深く傷ついてしまい、二度と小説など書くものかと意地になってしまったから。

⑤ おそらく批評家は小説を読んだものの、対応に困って妻に送り返させたと感じ取り、その行為の意味を、お前には小説を書く才能がないと無言で突きつけられたと解釈して自信喪失したから。

問6　傍線部オ「薔薇の香やつひに巴里は見ざるべし」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1)　傍線部オについて「私」が別の箇所で述べた次の文章を読み、「私」がこの句から読み取った父の思いの説明として**適当でないもの**を、後の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は㉕。

私の旅の最終目的地がパリ、ロンドンだと知って作った句であるという。旧制高校的教養の持ち主であった父の、ヨーロッパへの思いは私などよりはるかに濃かったのだ。

これまで、父にこの句があるのは知っていた。しかし、なぜか「薔薇の香やつひに巴里は見ざりしか」と記憶していた。そこには、ついに自分はパリに行かないまま一生を終えるのだなあ、という詠嘆が含まれていると思っていた。ところが、正確には、「見ざりしか」ではなく「見ざるべし」だった。「べし」の語感は正確に把握できないが、辞書によれば、当然、推量、妥当、可能、命令の意があるという。もし、この句の「べし」を推量の「べし」と取れば、それは単に将来にわたっても自分がパリを見ることはないだろうということを確認しているだけになる。もちろん、そこに「つひに」という強い言葉があるので、淡々とした事実の確認というわけではないが、少なくとも嘆じているだけでないことはわかる。息子である私がパリに行くということを踏まえ、一生行くことはないであろう自分を見据えている。

① 薔薇が美しく咲き誇るというあの巴里に、一度は行ってみたかったという無念。
② 一度も巴里に行く機会に恵まれなかったが、そういう人生もあるものだという諦観。
③ これから先も、自分が巴里に行くことはきっとないだろうという確信にも似た予感。
④ きっと自分は、巴里を見ないままで一生を終えてしまうのだろうなあという嘆息。
⑤ 洋行を夢見ていた自分の代わりに、ぜひ巴里を見てきてくれという息子への願い。

(2)　傍線部オに対する宗匠の批評として**適当でないもの**を、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は㉖。

① 夏を彩る薔薇の香りに巴里を重ねた若き日に思いを馳(は)せたくなる句である。
② 常に自分たちの意表を突いてくる五十八氏の真骨頂が発揮された句である。
③ 巴里の芸術・文化に想(おも)いを寄せる教養の深さがうかがい知れる句である。
④ 気障な印象を与えかねない巴里という題材を嫌味なく生かした句である。
⑤ 独特の感性を持つ五十八氏の若き日の人生遍歴をほうふつとさせる句である。

問7　次の(1)～(5)は、本文を読んだ高校生五人が本文の表現の内容や特徴について発言したものである。本文に即して、適当なものには①を、適当でないものには②を、それぞれ選びなさい。解答番号は ㉗ ～ ㉛ 。

(1)　生徒A――波線部ⓐ「夜の上り電車はがらんとしていた」は、父の命がもうあまり長くはないと知って、父が生きてきた証（あかし）として句集を作りたいと奮闘する一方で、「私」の心にぽっかり空いた穴を象徴しています。 ㉗

(2)　生徒B――波線部ⓑ「樟脳のひいやりとした匂と、絹物の持つ特有の冷たい肌触り、しゃんと身仕舞した外出姿」は、擬態語を用いることで、句に描かれた情景を感覚的に浮かびあがらせるという効果を持つ表現です。 ㉘

(3)　生徒C――波線部ⓒ「父の文章とはこういう文章だったのか……」には、父の書いた文章のリズムが、「私」の書く文章のリズムとよく似ていることを発見し、父子の見えない絆（きずな）を実感した「私」の感慨が表れています。 ㉙

(4)　生徒D――波線部ⓓ「母に向き直るような感じで耳を傾けた」は、母の話を聞き流していた「私」が、父がかつて文章で身を立てようとしていたと聞いて興味をそそられ、話に集中するさまを効果的に伝えています。 ㉚

(5)　生徒E――波線部ⓔ「そうした父の俳句が、参加していた小さな句誌の人たちに理解されていたとは思えない。」は、孤高の人であった父が周囲から敬遠されている様子を想像して胸を痛める「私」の心情を表しています。 ㉛